文部科学省委託：ユネスコ未来共創プラットフォーム事業
再委託「ユネスコ未来共創プラットフォームの発展に資するユネスコスクールネットワーク活性化事業」

第２回
ユネスコスクール関東ブロック大会
報告書

日時 ： 2021 年 8 月 7 日（土） 10:00～17:00
場所 ： オンライン（分科会Ⅰのみ大妻中野中学校・高等学校）

主催 ： 成蹊大学
共催 ： 玉川大学、東海大学、創価大学、神奈川ユネスコスクール連絡協議会

大会テーマ 「SDGs の広がり」

SDGs 達成に向けた担い手の育成は、文部科学省の新「学習指導要領」にも大きな現代的課題として強調されており、小学校から大学に至る教育機関だけでなく、企業や地方自治体などにとっても重要な課題となっています。さらに、現在のコロナ禍の状況において、現在・未来の社会の在り方が改めて問われています。ユネスコスクールネットワークの理念と活動は、未来を担う子供たち・若者だけでなく、今を生きる大人にとっても大切な何かを示してくれるかもしれません。本大会では、関東地域を中心としたユネスコスクールネットワークの活性化と活動の深化を促進するための交流や、情報の収集・共有を図ることを目的とします。ユネスコスクール加盟校・加盟希望校に所属する教職員・児童生徒学生のみなさん、そして、ユネスコスクールを支援もしくはご興味をお持ちの教育機関、研究機関、NPO、企業等のみなさんとともに、SDGs の広がりを国際的な観点から議論し、地域の視点での活動やその広がりを考え、学校間の連携やプロジェクト等の活動のいくつかを紹介します。

特設サイト ： https://www.seikei.ac.jp/gakuen/esd/unesco/
（2022 年 1 月 24 日より移管 https://www.unesco-school.mext.go.jp/conference/kanto2021/）

参加者数

約 400 名
ポスター・動画セッション応募件数： 18 件

当日スケジュール

時間	内容	場所
9:30	開場	
	分科会	
10:00– 12:00	1 玉川大学 SDGs 目標達成に向けて私たちにできること 高大連携による共同イニシアティブの試み 2 東海大学 第7回 UNESCO ユースセミナー ユネスコスクールと外国学校の中高生の出会い 3 創価大学 高校生による SDGs ソーシャルビジネスプロジェクト 高大連携国際プログラム SAGE を事例として 4 神奈川県ユネスコスクール連絡協議会 コロナの状況下におけるユネスコスクール活動玉手箱 5 成蹊大学 成蹊オーガニックコットンプロジェクト 小学 5 年生公開授業	大妻中野中学校・高等学校校舎と ｵﾝﾗｲﾝのﾊｲﾌﾞﾘｯﾄﾞ オンラインのみ ※一般参加なし オンラインのみ オンラインのみ オンラインのみ
12:00– 13:30	休憩 **ポスター（PDF）・動画セッション**	オンデマンド
	全体会 司会進行：成蹊学園サステナビリティ教育研究センター 池上敦子	
13:30–	開会式 挨拶：成蹊学園学園長 亀嶋庸一	オンラインのみ
13:45– 14:30	**基調講演** 「SDGs運動の広がり」 佐藤禎一氏（元日本政府ユネスコ代表部特命全権大使）	
14:45– 15:45	**分科会報告**	
16:00– 16:45	**ユネスコ本部との対話セッション** 斎藤珠里氏（ユネスコスクール国際コーディネーター）	
17:00	閉会 挨拶：成蹊大学学長 北川浩	

分科会

午前中は、5つに分かれ分科会を実施しました。

＜分科会１＞

タイトル
SDGs 目標達成に向けて私たちにできることー高大連携による共同イニシアティブの試み
運営者
玉川大学（小林亮＋ユネスコクラブ学生）＆ 大妻中野中学校・高等学校（水澤孝順・教職員＋生徒）
プログラム（会の構成、登壇者等）
1. SDGs 学習成果の発表とそれに対するコメント・質疑応答 ホールスクールで SDGs 学習を進めている大妻中野高校の生徒 4 チームがそれぞれ SDGs に関連するテーマ（①子ども食堂、②ごみ問題、③アニマル・ハラスメント、④日本とフランスの教育）についてプレゼンテーションを行い、それぞれについて玉川大学ユネスコクラブの学生がコメントを加えた。 **2. パネルディスカッション** プレゼンテーションに基づき、SDGs 目標達成に向けた教育の役割について、玉川大学の学生と大妻中野高校の生徒がパネルディスカッションを行った。 **3. ユース共同声明の作成** 世界のユネスコスクール・ネットワークに向けた玉川大学と大妻中野高校との「ユース共同声明」を日本語・英語・フランス語の 3 か国語で作成し、発表した。共同声明はユネスコ本部に送付した。
報告
第 1 分科会は、大妻中野中学校・高等学校のアゴラでの対面交流とオンライン参加とのハイフレックス方式で実施された。会場では約 50 名、オンラインでは 73 名が参加した。大妻中野高校生による SDGS プレゼンテーションは、2 チームが日本語、1 チームが英語、1 チームがフランス語での発表であったが、テーマが貧困と人権、環境、国際理解と多岐にわたっていたため、大学生のコメントやその後のパネルディスカッションでも話題がさまざまな関連分野に広がり、熱を帯びた多角的な議論が展開された。全5項目の「ユース共同声明」も発表テーマに対応して学際的な内容となったが、第5条「SDGSの目標達成に向けて世界の諸問題を知り、文化の違いを受け入れる勇気を持とう。私たちが直面してきた格差や暴力、環境問題などの壁を壊して、一人一人が幸せな未来をつかめる環境を創ろう。」のように、世界の諸問題の解決に向けた若者の当事者意識に基づく主体的アクションを志向する内容にまとまった。
分科会を通して得た気付き、今後に向けた提言やメッセージ
ユネスコスクール加盟校である玉川大学と、ユネスコスクール加盟申請校の大妻中野中学校・高等学校とが学校種を超えて連携し、SDGs 目標達成に向けてどこに問題があるのか、自分たちには何ができるかについて意見交換しながら共通の気づきや思いを「ユース共同声明」という決意表明にまとめることができたところに第 1 分科会の大きな意義があった。高校生と大学生とが SDGs のテーマについて意見交換を行うことで、それぞれ学校の授業や課外活動で学んだ内容を、また別の角度から見つめ直すよい機会になったと思われる。ユネスコスクールは国や民族を超えた世界的な学校間ネットワークであることに大きな意義があるので、今後は今回の異学校種間連携の成果を生かしながら、海外のユネスコスクールとの交流や SDGs テーマについての共同学習に繋げてゆければと願っている。そこでは ESD や GCED と並んでユネスコスクールの重点領域とされる異文化間学習について、文化による視点や価値観の違い（と共通性）を実体験し、違いを乗り越えてグローバルな連帯感と友情を育めるようなプログラムを開発してゆきたいと考えている。その意味でも今回作成した「ユース共同声明」は世界のユネスコスクール関係者に積極的に発信し、今後のユネスコスクールの海外連携に繋げてゆきたい。

<分科会2>

タイトル
第7回 UNESCO ユースセミナー　ユネスコスクールと外国学校の中高生の出会い
運営者
東海大学
プログラム（会の構成、登壇者等）
東海大学担当の分科会では、2015 年以来毎年開催してきた「UNESCO ユースセミナー」の第 7 回目をオンラインで開催しました。UNESCO ユースセミナーは、神奈川県内のユネスコスクールおよび関東圏の外国学校などの高校生と教員が参加して意見を交換する多文化共修イベントで、毎回、東海大学やその他の大学の学生たちがその出会いをファシリテートしています。第 1 回から第 5 回までは1泊2日の宿泊型セミナーとして開催され、前回と今回はオンラインで開催されました。 参加者は総数で 59 名。参加した学校は、（あいうえお順に）神奈川県立有馬高等学校、横須賀市立横須賀総合高等学校（以上、ユネスコスクール）、エスコーラ・オプソン（ブラジル学校）、神奈川朝鮮中高級学校、TS 学園（ブラジル学校）、ブリテイッシュ・インターナショナルスクール（以上、外国学校）で、その他に都立国際高等学校からも高校生 3 名の参加がありました。ファシリテートにまわってくれた大学生や若者は、東海大学、東京外国語大学、明治学院大学の学生たちと、ジュニア会（ブラジルのカンピーナス日系人会のユースグループ）のメンバーたちでした。 今年のテーマは「学校間の出会いで国際交流をしよう!」で、プログラムとしては、最初にまずじっくり「アイスブレイク」をして、次に参加学校が取り組んでいる異種学校間の交流の事例報告をしてもらいました。参加者は、事例の発表ごとに小さなグループに分かれて感想をシェアし、すべての発表を聞いた後には、それらの事例を参考に、これからどんな多文化交流のイベントや活動を作っていくことができるか案を出し合いました。
報告
参加学校が発表した事例は以下の通りです。 - 横須賀総合高校：米軍横須賀基地の学校との交流 - 神奈川朝鮮学校：地域の公立学校との交流 - 有馬高校 ＆ 東海大学 ＆ ブリテイッシュ・インターナショナルスクール：LANGUAGE AND CULTURE EXCHANGE プログラム - オプソン・ブラジル学校：カンピーナス・ジュニア会とのオンライン交流 今回は、時間不足で最後のディスカッションの結果をシェアし合うことができませんでした。しかし、各小グループの話し合いの結果をまとめたものを見ると、以下のようなクリエイティブかつ具体的な案が出ていたようでした。 - 外国学校と日本の学校では卒業式や文化祭、体育祭にそれぞれの学校の特徴が出ているため、お互いの学校行事に招待しあって参加交流をする。 - ユネスコスクールと外国学校の生徒たちが集まるミニオリンピックを開催する。 - 一緒にダンスをする会を開催する。 - 一緒にゲームをする会を開催する。 - （対面で）「ただ話すだけ」の会、あるいはキャンプを開催する。 - ランチを一緒に食べる。 - それぞれの学校で撮影した動画をつなげてミュージックビデオを作成する。 - エスコーラ・オプソンとブラジルのユースグループが続けている活動のように、たとえコロナの状況が続いてもオンラインでなら交流が続けられるので、そのような交流を海外の人たちともやってみたい。

- お互いの国のジェスチャーを教え合う。
- 様々な外国学校やユネスコスクールの生徒たちが、日本語と英語とポルトガル語の3か国語を駆使して、みんなで国際問題を考える。そのような目的で長期的なミーティングを繰り返し開催したい。

分科会を通して得た気付き、今後に向けた提言やメッセージ

今年は「分科会」の形で UNESCO ユースセミナーを開催しましたが、所定時間内にプログラムを終わらせることができずフラストレーションが残りました。次回からは（同様の分科会を担当するのであれば）UNESCO ユースセミナーそのものを実施するのではなく、セミナーの準備のプロセスについて共有し合う機会にしたいと考えています。

2022 年度の UNESCO ユースセミナーのテーマは「包括的セクシュアリティ教育」に決まっており、ユネスコ本部の担当者も来日を予定してくれています。せっかくの機会なので、年間を通じて様々な学校における取り組みを発表しあうなどのプロセスを取ることができたらと考えています。最後の総まとめとして 2023 年 3 月にユースセミナーを開き、ユースと教育が議論する機会が持てるようにしたいと思います。

<分科会3>

タイトル
高校生によるSDGsソーシャルビジネスプロジェクト～高大連携国際プログラムSAGEを事例として～
運営者
創価大学
プログラム（会の構成、登壇者等）

司会進行：宮崎　猛（創価大学教職大学院教授）

10:05　開催挨拶　　吉川　成司（創価大学教職研究科長）
10:10　SDGs 教育プログラム SAGE JAPAN とは　　宗像　佳子（創価大学宮崎ゼミ）
10:25　司会より補足説明
10:30　SAGE JAPAN Cup 優勝チームによる発表　　チーム「IP+」（都立千早高等学校）
10:50　チーム「IP+」との質疑応答
11:00　SAGE World Cup（ビデオ）
11:05　大学生サポーターとして携わって　　天野　宏行（創価大学卒業生）
11:10　審査員、アドバイザーとして関わって　　鈴木　将史（創価大学副学長）
11:20　質疑応答、補足説明
11:40　閉会

報告

本分科会は、ユネスコスクールではもっとも大切なテーマとなっている SDGs を、各学校でどのように具現化するかという課題に対して、一つの事例を紹介したものでした。

当日紹介されたプログラムは「SAGE JAPAN」という教育プログラムです。SAGE (Students for the Advancement of the Global Entrepreneurship)は、各国の高校生がそれぞれの国や社会で取り組んだアントレプレナーのプロジェクトを披露するための国際組織で、2002 年に米国で立ち上げられました。日本では創価大学教育学部の学生が、社会貢献や教育的な要素を強調したプログラムとして、2013 年に立ち上げました。SAGE JAPAN は、高校生が大学生や企業人のサポートを受けながら社会貢献プロジェクトを考案・実践していくというプログラムで、高校生が主体となり、大学生サポーターと共に SDGs を具現化するというユニークなプログラムになっています。

当日は、SAGE JAPAN の仕組みや特徴についての発表、2021 年 3 月に行われた SAGE JAPAN Cup で優勝した高校生チームによるプレゼンテーション、2019 年 8 月にサンフランシスコで行われた世界大会 SAGE World に出場した日本の高校生チームの活躍を伝えるビデオ、高校生チームをサポートした大学生の経験談、審査員やアドバイザーとして設立時より携わってきた本学副学長からの SAGE JAPAN 発展の経緯やその意義などについての紹介が行われ、その後質疑となりました。質疑では課題解決型学習の今日的な意義などについて活発な発言がありました。

SAGE JAPAN の詳細については http://sagejapan.jp（HP:SAGE JAPAN）

分科会を通して得た気付き、今後に向けた提言やメッセージ

ユネスコスクール活動や ESD は、単に初中等教育段階にとどまるものではなく、高大連携の中で活動を捉えることに持続的・発展的な意味がある。その点で、今回紹介した SAGE JAPAN は、高校生と大学生がチームを組んで問題を見出し、解決へのプランを提示するという方式により、高大連携の一つの姿を示していると言える。実際、SAGE JAPAN に取り組んだ多くの高校生たちが、社会貢献に対して高い意識を持つようになり、大学での進路選択において社会学的な学問を求めるなど、単に高校時代の一過性の取組みでなく、その後の学びや人生設計へと連動している姿が多く見受けられる。

加えて、SAGE JAPAN の活動が世界大会 SAGE World に直結していることから、高校生たちの中に「世界に向けた動きの中にいる」という実感が生まれ、世界市民性の涵養にもつながっている。

こうした点で SAGE JAPAN は、ASPUnivNet の活動目標とも重なる意義のある活動であり、今後も何らかの形で連携していくとよいのではないかと思われる。

<分科会4>

タイトル
「コロナの状況下におけるユネスコスクール活動玉手箱」
運営者
「神奈川県ユネスコスクール連絡協議会」
プログラム（会の構成、登壇者等）
開会　会長挨拶　住田会長 分科会進行の説明　望月事務局長 横浜市立永田台小学校報告 横浜市立幸ケ谷小学校報告 横浜市立市ケ尾中学校報告 湘南学園中学校高等学校報告 横浜シュタイナー学園報告 横浜市立東高校報告 横須賀市立横須賀総合高校報告 神奈川県立有馬高校報告 質疑・応答 閉会　会長講評　住田校長
報告
住田会長から「神奈川県内のユネスコスクールはコロナ禍の厳しい状況の中、それぞれ工夫をしながらユネスコスクール活動を行ってきた。その実践例を発表してゆく」旨の挨拶があり、続いて各校からの発表が行われた。 （1）　横浜市立永田台小学校 学校壁面へのプロジェクションマッピングの作成など、地域の方々と共同の行事を行い、それによって地域の変容も見られるようになった。ホールスクールアプローチの取り組みも行ってきた。 （2）　横浜市立幸ケ谷小学校 地域に残る古いステンドグラスを取り上げた調べ学習を行った。そうした活動の中で「問い」を深めてゆくことで自分自身と社会を変容させるための学びを進めていった。 （3）　横浜市立市ケ尾中学校 各種委員会活動に SDGs17 目標を位置づけた。市ケ尾中学校オリジナルマイバックを作成し地域へその活動を発信していった。「木のストロー」を題材にESD活動について考えた。 （4）　湘南学園中学校高等学校 「湘南学園ESD」を進めた。「食育」をテーマにし、中1生のクラスランチを入門編にした。オンライン特別講座「農と食の原風景」という連続講座を実施。そのなかで実際のフィールドを訪問した生徒もあった。 （5）　横浜シュタイナー学園 文化の多様性理解、環境教育などを通して ESDの担い手を育んでゆく。学園が進めるホリスティックな教育では遠隔授業は難しい。教員による家庭学習教材作成、配布などの工夫をした。また、生活のリズムを壊さないよう時間割表を作成、電話でのコミュニケーションも図った。 （6）　横浜市立東高校 1年生で1泊2日のグローカル・シチズンシップキャンプを実施した。50 名位の留学生とグループに分かれ、それぞれの国の課題等について話し合った。この体験を通して国際的な課題への関心が高まった。「総合的な探求の時間」が教科横断型学習とリンクする形で進められた。

（7）　横須賀総合高校

現在キャンディデート校として登録待ちの状態。国際委員会の「服のチカラ」プロジェクトなど各種委員会活動、学校行事、授業などを通してユネスコスクール活動を実践している。体育の授業では SDGsの目標をテーマにしたダンスを生徒たちは考えて発表した。

（8）　神奈川県立有馬高校

海外姉妹校交流や海外修学旅行ができない状況。ユネスコ委員会が発足して学校全体での取り組みができるようになった。近隣の外国学校との交流（日本語学習など）が始まった。オンラインを活用する形での取り組みが進んだ。

・　各校の活動について若干の時間、質疑応答があり、閉会した。

分科会を通して得た気付き、今後に向けた提言やメッセージ

神奈川県ユネスコスクール連絡協議会には様々な校種の学校が参加している。小学校は比較的身近な地域との交流が活発に行われてきており、一方で高等学校の中には海外との交流が行われている学校もある。しかし、今日のコロナ禍の状況の下では近隣地域とも、海外の学校とも直接的な交流は難しくなっている。

そうした厳しい環境下にあっても、それぞれの学校は持続可能な社会造りの担い手を育てるために様々な工夫や取り組み、活動を進めて生徒の変容を図ってきている。8校の発表からもそうした実践を知ることができる。

ユネスコスクールは ASP.net と英語では表記され、学校間のネットワークを大切にしている。小中高、シュタイナー学園など身近な様々な校種との交流はそれぞれの学校にとって新しい気付きをもたらすことになるだろう。また、遥か遠い地域や海外のユネスコスクールとの交流は地球市民として連帯しながら持続可能な未来を創るための「協働」の大切さを学ぶことにもなる。

現在、関東ブロックにおいて、都県単位のユネスコスクールネットワークは神奈川県以外では未成立のようである。ぜひ、今後、各都県でもネットワークが生まれ、このブロック大会で多くのユネスコスクールから特色ある、優れた実践が報告され、そうした事例を参考にしてより充実したユネスコスクール活動ができるようになることを期待したい。

<分科会5>

タイトル
成蹊オーガニックコットンプロジェクト ～小学５年生公開授業～
運営者
成蹊学園サステナビリティ教育センター　成蹊小学校
プログラム（会の構成、登壇者等）
分科会5は、以下スケジュール構成で実施した。 10:00～　　分科会開始　司会者より注意事項の説明 10:05～10:55　公開授業（授業は教室にて行い、オンラインで生配信。） 10:55～11:05　休憩（10 分間時間をとる） 休憩の際に、授業参加児童は下校。 11:05～11:55　分科会　意見交換会 登壇者・授業者は、山本剛大（成蹊小学校）。 司会者は、関口薫（成蹊小学校）。 オンライン配信に関する管理・撮影等は、永松啓治（成蹊小学校）と成蹊学園職員の皆様。 授業は、現在栽培活動を行なっている「コットン」を通して、“自分たちが着る衣類がどうやってできているのか知らない”ということに気がつき、「衣生活」の抱える社会的課題に迫り、自分の「衣生活」を見つめ直すきっかけを得ていくことを、目的とした学習を行なった。 その授業や関連する社会的課題について参加者と授業者で意見交換会を行った。
報告
“衣食住”という言葉では“衣”が最初にくるのに、私たちは自分たちが着る衣類が「どうやって、どこで誰の手で、作られているのか」知らない、ということが、この授業の始まりとなっています。 子どもたちには「今回は、オーガニックコットンプロジェクトとして、綿を育て、T シャツを作ろうとしているよ。」と伝え1学期より栽培活動をしてきました。自分たちの畑は、有機・無農薬の栽培をしているので、オーガニックだということを知っていますが、「オーガニックコットン」という言葉を知らない子が大半でした。 それでも、栽培をはじめると、「お店でオーガニックコットンの服売ってたよ。」というような報告をたくさん受けました。色々と自分で調べた子達もいたようです。 オーガニックコットンを普及する団体、Orovill Sustainable Cotton Project によると、 世界のコットン畑では、世界の殺虫剤の使用量の25%が畑に撒かれている、防菌剤・除菌剤使用量の10%が撒かれている、1キロの綿花を収穫するのに5キロの農薬が使われている。 では、大人用 T シャツ、1枚あたりに使われる農薬量は、どのくらいでしょうか。 1枚を450グラムとすると・・・なんと150グラムもの農薬が使われています！ ここに児童労働や、環境への負担などの話題も加えて、これから私たちはどのように考え消費生活を送っていけば良いのか、服を購入する際の一つの選択肢となっていくと良いなぁと思い授業を行いました。   実際に世界のオーガニックコットンに触れてみるなど、実物や実際の作業を通して考える機会を得ていった授業を公開形式で見ていただきました。
分科会を通して得た気付き、今後に向けた提言やメッセージ
分科会を通して、いろいろなアドバイスや助言をいただきました。一つの事象から社会を見つめる目を養っていくことは、小学生への教育として良いものだということを改めて、皆様から教えていただきました。また、一緒になって取り組んでいこうと考えてくださる方々がたくさんいたことも大きな財産となりました。

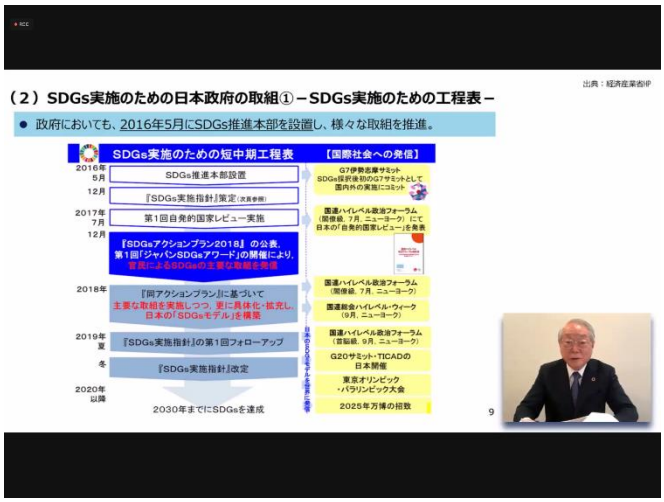
ポスター（PDF）・動画セッション

SDGs の広がりを国際的な観点から議論するもの、地域の視点での活動、学校間の連携やプロジェクト等について、現在・過去の活動事例、今後の活動計画等の発表を広く募集し掲載しました。オンデマンドで、大会当日朝から参加者がいつでも視聴できるようにしました。

<発表一覧>
・学校内に設置した複数の温度計による気温分析／吉田有里（成蹊高等学校 3 年・天文気象部）
・成蹊小学校図書室における SDGs の取り組み／関口薫（成蹊小学校教諭）
・たしかなあしぶみ～ユネスコスクール成蹊の歴史を未来へ～／成蹊中学校　特別研究グループ「ユネスコスクール」
・コロナ禍での成蹊高校におけるダイバーシティ活動／五十嵐菜月（成蹊高等学校 3 年）
・成蹊大学学生ボランティア本部 Uni.の活動紹介／成蹊大学　学生ボランティア本部 Uni.
・トレイルカメラがとらえた成蹊の野生動物／成蹊中学校　自然科学部
・身近な地域の環境問題を地図から考察する／内川健（成蹊小学校教諭）
・成蹊小学校のサステナブルな一日「学びたいから学ぶ」／成蹊小学校
・ならまちづくり・不東／近畿 ESD コンソーシアム
・「理論的に問題を解決する子ども」の育成を目的とした実践／大久保遥峰（成蹊小学校教諭）
・小学校低学年における持続可能な裏庭活動／新谷祐貴（千葉大学教育学部附属小学校教諭）
・複言語学習でグローバルな人材を育成する!!／石橋瑞葵（大妻中野女子高等学校 3 年）
・NPO 法人子ども大学くにたちの SDGs 普及のための取り組み／NPO 法人　子ども大学くにたち
・SDGs 普及の取り組み：SDGs 全国子どもポスターコンクールのご紹介／SDGs 子ども大学運動実行委員会
・南極　・北極　から SDGs（持続可能な開発目標　）の担い手を育てる／公益財団法人　日本極地研究振興会
・子どもが問いをつくる授業～探求を通した ESD～／市川敦（成蹊小学校教諭）
・環境啓発施設　むさしのエコ re ゾートの取り組み／武蔵野市　環境部環境政策課
・UNESCO　ユースセミナー：ユネスコスクールと日本の外国学校との多文化共修の出会い／小貫大輔（東海大学）、星久美子（CRI-チルドレンズ・リソース・インターナショナル）、望月浩明（神奈川県ユネスコスクール連絡協議会）

全体会

基調講演



「SDGs運動の広がり」というテーマで、佐藤禎一氏（元日本政府ユネスコ代表部特命全権大使）にご講演いただきました。

<講演概要>
SDGsは 2015 年に始まりました。教育の分野では、ユネスコが早くから取り組んだ ESD の積み重ねがあり、ユネスコスクールの活動とも相まって、活発な運動が展開されています。しかし、目を他の分野に向けてみると、国連を中心に様々な活動があり、これらの活動と教育分野との連携は必ずしも十分ではないと思われます。少なくとも、他分野の活動も視野に入れる必要がありそうです。改めていくつかの事例をご紹介し、今後の活動の参考にしていただければ幸いです。その際、他分野の活動にしろ、ユネスコや国連の活動にしろ、批判的な思考を加えることを望みます。

<講師略歴>
佐藤禎一氏は京都大学法学部を卒業後、文部省（現文部科学省）に入省し、文部事務次官、日本学術振興会理事長、ユネスコ日本政府代表部特命全権大使、東京国立博物館長を歴任されました。現在も、国際動向からみた我が国の大学政策の検証をテーマに研究を続けられるだけでなく、高等教育に関わる様々な場でご活躍されています。

＊ 基調講演は、大会後も特設サイトより、オンデマンドで視聴可能としています（2022 年 3 月まで）。
https://www.youtube.com/watch?v=BzFP-qBviRY

分科会報告

午前中に行われた5つの分科会について、各分科会の代表者から成果報告とそれについての質疑応答が行われました。

ユネスコ本部との対話セッション

玉川大学の小林亮教授の進行で、斎藤珠里氏（ユネスコスクール国際コーディネーター）から ASPnet の最新状況をお話いただいた後、自由な対話の場が設けられました。

<斎藤珠里氏略歴>
コロンビア大学ジャーナリズム大学院を卒業後、日本テレビ・ニューヨーク支部および NBC でジャーナリストの経歴を積まれました。2007 年松浦晃一郎ユネスコ事務局長の広報官に採用されて以来、ユネスコ本部の専門職員として活躍しておられます。2020 年 2 月にはユネスコスクール国際コーディネーターに就任されました。

参加者アンケートの実施

全体会終了後に、参加者にアンケートを実施しました。有効回答数 136

1. この大会にはどのような立場で参加されましたか

学校教員（ユネスコスクール）	35
学校教員（ユネスコスクール以外）	11
大学教職員	35
行政関係者	1
企業	1
NPO・市民団体	6
ユネスコ協会・クラブ	12
学生・生徒・児童	26
その他	9

2. どの分科会に参加されましたか

分科会1：SDGs 目標達成に向けて私たちにできること	35
分科会2：第7回 UNESCO ユースセミナー	1
分科会3：高校生による SDGs ソーシャルビジネスプロジェクト	18
分科会4：コロナの状況下におけるユネスコスクール活動玉手箱	22
分科会5：成蹊オーガニックコットンプロジェクト	50
いずれの分科会にも参加しなかった	10

3. 分科会はいかがでしたか（複数回答可）

楽しかった・面白かった	73	32.3%
勉強になった	**98**	**43.3%**
今後の活動の役立つ内容だった	54	23.9%
特に得るものがなかった	1	0.4%

4. 全体会 ：基調講演「SDGs運動の広がり」はいかがでしたか（複数回答可）

楽しかった・面白かった	14	8.2%
勉強になった	**85**	**50.0%**
今後の活動の役立つ内容だった	33	19.4%
特に得るものがなかった	4	2.4%
参加しなかった	34	20.0%

5. 全体会：分科会報告はいかがでしたか（複数回答可）

楽しかった・面白かった	25	13.8%
勉強になった	**79**	**43.6%**
今後の活動の役立つ内容だった	43	23.8%
特に得るものがなかった	2	1.1%
参加しなかった	32	17.7%

6. 全体会 ：ユネスコ本部との対話セッションはいかがでしたか（複数回答可）

楽しかった・面白かった	34	17.6%
勉強になった	**67**	**34.7%**
今後の活動の役立つ内容だった	46	23.8%
特に得るものがなかった	2	1.0%
参加しなかった	44	22.8%

7. ポスター・動画セッションはいかがでしたか（複数回答可）

楽しかった・面白かった	50	26.3%
勉強になった	**60**	**31.6%**
今後の活動の役立つ内容だった	35	18.4%
特に得るものがなかった	1	0.5%
閲覧しなかった	44	23.2%

8. ご感想・ご意見をご記入ください

主な回答

・今後の自分自身の在り方や指導を考えていく上で非常に勉強になりました。
・今後の自校の活動を考えるアイデアをたくさんもらいました。
・各校の多様な取り組みを知ることができて、さらに、基調講演、対話セッションを通じて、今後の活動の発展にどのように取り入れていくべきかを考えさせられた。
・とても豊かな学びのある 1 日でした。
・オンラインだと大変参加しやすいので、アフターコロナでもオンライン参加可能な手段を併用いただけるとありがたいです。
・多彩なプログラムで有益な情報がたくさん得られました。またプログラム構成（休憩のタイミングや時間配分など）もよく参加しやすかったです。
・ユネスコスクールどうしの交流や様々な分野の方との意見交換・協働が今後もできればと思いました。
・小学校同士、交流できる分科会があるとよいと思いました。

全国大会での報告

11 月 27 日（土）に開催された第 13 回ユネスコスクール全国大会において、分科会5を担当した成蹊小学校の山本剛大教諭が、関東ブロック大会当日の様子を伝え、成果を報告しました。